

## 第5回 宗門教学会議 開催報告（後半）

# 理想の念仏者像を求めて

— 日本社会で求められる僧侶像・寺院像 —

※第5回宗門教学会議委員

釈徹宗氏  
相愛大学教授

前田純代氏  
元野村総合研究所コンサルタント  
安芸教区善法寺坊守

三田真史氏  
京都新聞社編集局文化部長・論説委員

徳永一道氏  
とくなが いち どう  
勸学寮頭

※座長  
丘山願海  
おかやま がん かい  
浄土真宗本願寺派総合研究所長

※司会  
藤丸智雄  
ふじまる ち ゆう  
浄土真宗本願寺派総合研究所・副所長

満井秀城  
みつ い しゅうじょう  
浄土真宗本願寺派総合研究所・副所長

『宗報』（五月号）では、「理想の念仏者像を求めて——日本社会で求められる僧侶像・寺院像——」をテーマに開催された第五回・宗門教学会議の前半の模様について報告しました。当日、議論された以下六つのテーマのうち、今回は後半の三つの項目についてお伝えします。

一、人のために生き、人と共に生きる「一緒性」

二、信頼される僧侶・選ばれる寺院とは

三、法話力とは

四、講師の資質について

五、坊守の力を活かすために

六、誰もが学びを深めるために

尚、当日の司会は、本願寺派総合研究所副所長の藤丸智雄が務めました。

## テーマ④

## 講師の資質について

〔司会・藤丸〕 後半ではまず、得度習礼

や教師教修、その他研修会などの「講師」について議論したいと思います。僧侶育成体系プロジェクト委員会がまとめた答申書「一〇年、二〇年後の日本社会で求められる僧侶像・寺院像」（『宗報』二〇一六年一一・一二月合併号掲載）のなかに、「講師」の養成に関する記載があります。これは、講師そのものの質を高めることによって、僧侶全体のレベルアップを目指そうという考えです。この点について議論を進めてまいりたいと思います。

### 講師が魅力的でなければ 受講者の心が離れてしまう

〔釈〕 「講師」の話題が委員会に挙がった背景には、得度習礼や教師教修での「講師」の存在の大きさが再確認された

からです。講師の話や生き方に感銘を受け、受講生自身の生き方が変わったという声が多数聞かれました。逆に言えば、講師が魅力的でなければ受講者の心が離れてしまうということでもあります。これまで、講師に対して特別な資格やトレーニングの受講などは義務付けられていませんでした。また、この考え方の背景には、僧侶の免許更新は難しいが、講師の更新制度は可能ということもあります。

平成三十三年に日蓮宗では、日蓮上人の生誕八〇〇年記念が行われますが、それに向けて宗門大改革への取り組みが行われています。その三本柱の一つが寺院子弟の教育です。同じく浄土宗でも昨年から新たな習礼制度を取り入れ、僧侶養成に力を入れています。このように、仏教他派がこぞって宗門内の人材育成に着手するということは、我々と同じようにそ

の重要性を察知しているということでしょう。考えてみれば、人材育成は宗教マターのなかでも最も重要な案件の一つです。

人材育成への取り組みに魅力がないと、宗派に属する意味自体が薄れ、宗派に所属するメリットは低減する一方です。単立になった方が良いと考える寺院も増えてくる可能性があります。そんな状況のなか、やはり宗派というのは第一に人材育成について再考察すべきでしょう。優れた講師育成システムが、結果として宗門の人材育成に結び付くと期待されます。

### 受講者のニーズに応じた 学習の仕組みを構築したい

〔丘山〕 「答申書」（四四頁）に掲載される「新僧侶育成体系の全体像」では、「上級教師課程」と「専門講師」という二つの新設コースが記載されています。「上級教師課程」とは、得度や教師で講

## 第5回 宗門教学会議 開催報告



義を行う先生方の一定の質の確保のために、講師陣の学習機会を提供するものです。他方、「専門講師」とは、医者や弁護士など各専門分野で活躍されている方に、宗門の状況をふまえてつづき僧侶養成に携わっていただくシステムです。さらに、「住職課程」を設けて、住職だけでなく坊守さんなど、希望者が受けたいコースを選択できるような仕組みを模索しています。これらの仕組みを通して、一人ひとりのニーズに応じた質の高い学びを提供できればと考えています。

### 釈 徹 宗 氏

一九六一年生まれ。龍谷大学文学部仏教学科卒業。一九九八年、大阪府立大学大学院人間文化研究科博士課程比較文化専攻修了。現在、相愛大学文学部教授、大阪教区豊島北組・如来寺住職、特定非営利活動法人リライフ代表。宗派では僧侶育成体系プロジェクト委員会委員を務める。専門は宗教学。

#### 【著作】

『宗教は人を救えるのか』（角川SSC新書、二〇一四年）  
『死では終わらない物語について書くかと思う』（文藝春秋、二〇一五年）  
『歎異抄（一〇〇分）名著』（NHK出版、二〇一六年三月）など

### 定期的に自分を客観的に 見つめ直す場が必要

（前田） 坊守も参画可能な研修制度が設けられている点は、個人的に大変ありがたいです。私の場合、最近では、お勤めやご法話を学ぶ研修に参加できておりません。だから法務をしていますが、不安がともないます。定期的に受けられる研修があることは嬉しいことです。研修を通して自分を客観的に見る機会を持つことが重要だと思います。

企業に勤めていた頃、プレゼンテーシ

ョンの基礎を叩き込まれました。「聴衆が分かる言葉を使う」「ポイントを絞る」など、徹底して教え込まれました。最も嫌だったのが、自分が話している姿をビデオで撮られ、見なければいけないことです。でもこれは後で、自分を客観的に見る方法として、すごく役に立ちました。自分自身を振り返る場として、こうした研修を行うことは大切だと思います。

（藤丸） 僧侶の人材育成について調べる

## 情報コーナー

と、真宗と他宗との違いが見えてきます。日本の伝統的な人材育成は、師匠が弟子を独り立ちできるまで面倒をみるという手法が主流で、このスタイルが今も職人育成の場などを中心として存続してきているようです。この手法を最も長く継続し、重視してきたのがお寺です。現在も、他宗では親が師僧となり、寺院子弟を育成するという形式が継承されています。しかし真宗では、師弟関係とは異なる様式で寺院子弟教育を行ってきました。そうした環境の違いが、人材育成にも影響を与えているように思いますが、釈先生、いかがでしょうか。

### 多様なカリキュラムを 充実させることが重要

(釈) 確かに、そこは真宗教団の大きな特徴でしょう。今おっしゃった通り、他派は師弟関係によって僧侶を育成してきました。そして多くの場合は、父親が師匠で子どもが弟子です。親子教育・家庭

教育と地続きとなっています。つまり、宗派も各家庭に寺院子弟の教育を委ねていた面が大きいようです。しかし、それが難しい時代になっています。そこで、宗派が積極的にカリキュラムを作成し、人材育成に取り組もうとする方向へとシフトしているとのこと。一方、真宗は師弟関係を結ばないからこそ、早くから教育制度を構築して、プログラムやカリキュラムの工夫による僧侶育成を行ってきました。その伝統をもとに、より良い僧侶育成・教育制度を検討すべきだと考えます。それに、寺院運営に関する知見や財務や税務など、実務・実践の知識を身に付ける必要性も高まっています。つまり、浄土真宗お得意である人材育成のプログラムも転換期を迎えているという事です。

### 真宗・仏教を学ぶためにも 「学階」を取得して欲しい

(徳永) 講師の「資格」に関して、宗門

には「学階制度」があります。「学階」とは、真宗学や仏教学に精通した度合いに応じて与えられる資格のことで、「得業」「助教」「輔教」「司教」「勸学」と五段階があります。通常、輔教までは試験、以降は論文審査などによって、昇階する決まりです。「学階制度」を通して、ぜひ真宗・仏教の学びを深めていただきたいと思います。

### 生涯の「学び」を 身に付けられる学階制度

(満井) 宗派の制度のなかで、学階制度は生涯にわたり学び続ける姿勢をしつかり身に付けられると思います。私は他大で仏教でも真宗でもない学問をやっていました。教師検定の際に、ある和上の真宗学概論の授業を受けて感銘を受けたのが第一歩でした。そして、学階制度の存在を聞き、それを歩むなかにおいて、学問研究がご報謝だと思えるようになりました。この学問研究には終わりは



## 第5回 宗門教学会議 開催報告

ないし、ご報酬にも終わりは無い、そういうモチベーションを持ちうる制度が宗派にはあると思います。私はそれを学階制度に見出しているわけですが、新たに息吹<sup>いぶき</sup>を与えるようなことがさまざまな場面であり得ると思います。勤式<sup>ごんしき</sup>においても布教においても、それがあられると思います。

### 真宗講座と協力して 講師養成に取り組みたい

（徳永） 全国各地で勤学寮主催の真宗講座を開いています。そのノウハウを先ほどから議論されている講師養成のメニューに組み込んでどうか。勤学寮としてもできる限りの協力をしたいと思っています。

（藤丸） 本願寺派では、研修が人材育成の中心となっています。この研修の場を充実させていくことの重要性が確認できたように思います。そうすると、どのよ

うに充実させていくかが課題となるわけですが、「講師」と「内容」のことが話題となりました。講師の資質向上については、具体的な取り組みとして既に提案されておりまして、今後が大いに期待されます。また、「内容」については学階という宗派の伝統的な勉強方法や真宗講座の活用が提案されました。こちらは、全く新たな提案で、びっくりしまし

たが、先ほど釈先生もおっしゃった通り、伝統的なものを活かすことも大切でしょう。本日は、おそらく担当部署の方も聴講されているでしょうから、ご議論いただければと思います。さて、内容について、丘山所長と前田先生から、坊守の研修について言及がございました。ここで、「坊守」の育成について皆さんと議論したいと思っています。

## テーマ⑤

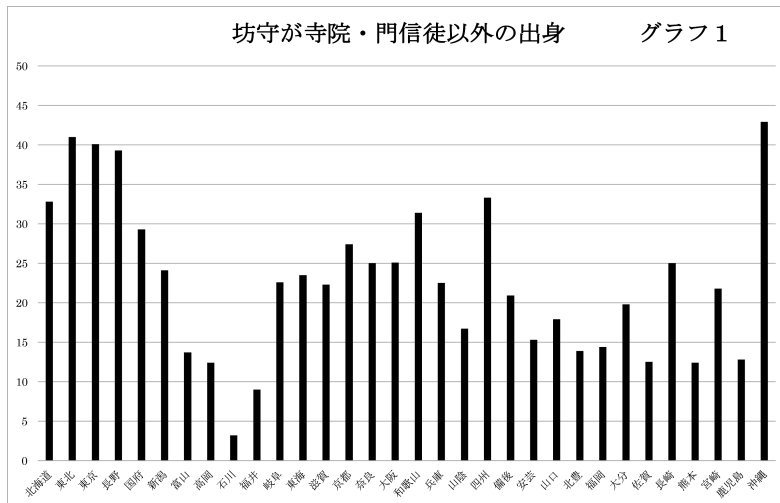
### 坊守の力を活かすために

（藤丸） お手元に配付した資料は、第一〇回・宗勢基本調査の集計結果をもとに作成した資料です。【グラフ1】は、坊守さまがご寺出身でもご門徒の出身でもないという割合を示したものです。また【グラフ2】には、坊守さまが宗門関係学校やその他の教育機関などで、仏教・真宗を学んでいない割合を示しています。おおよそ四〇～五〇%となっています。ここが課題の一つかと思っています。

そして【グラフ3】は、坊守さまが法務に携わっている割合を示したものです。坊守さまによる寺院での活躍はとても重要な意味を持っていますが、仏教や真宗の「学び」について住職の数値と比べると、学校で学ぶ機会が乏しい<sup>とほ</sup>という現状があります。「答申書」でも「坊守の力を活かすために」との提言がありますが、この点についてどのような議論があったのか、釈先生から説明をお願いします。



坊守が寺院・門信徒以外の出身 グラフ 1

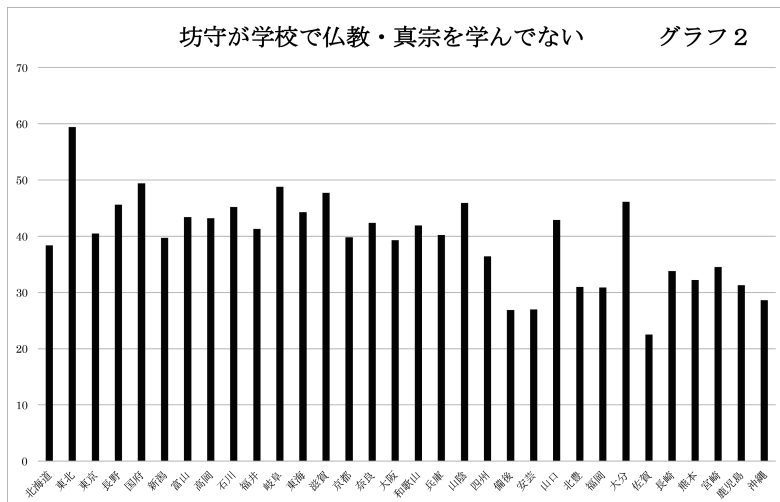


## 家族による寺院運営を 活かすことが課題

まずでしょうか。

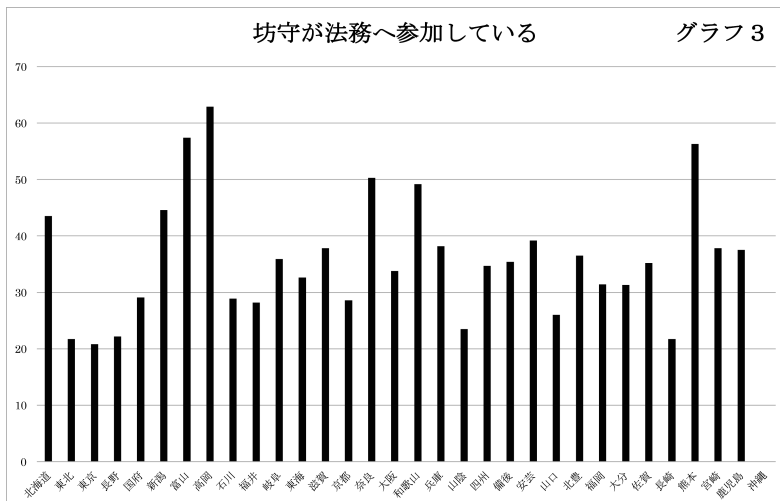
〔釈〕 真宗寺院の特徴の一つは、坊守の

坊守が学校で仏教・真宗を学んでない グラフ 2



存在・活動です。そもそも日本の仏教寺院最大の特徴として、「家族での運営」が挙げられます。そのため、日本における寺院の持続可能性を高める大きなテーマとして、家族のモチベーションがあります。住職が学びを深めるだけでは、日

坊守が法務へ参加している グラフ 3



本の寺院の実情と噛み合いません。住職以外の家族の学び・育成・モチベーションのサポートなどに目を向けることが重要だと考えます。  
ご存知のように、住職のパートナーを「坊守」と呼ぶ場合が多い。これは我々



## 第5回 宗門教学会議 開催報告



## 前田純代氏

一九七三年生まれ。東京大学文学部卒業。一九九七年より株式会社野村総合研究所 コンサルタントとして勤務。その間フランスHEC経営大学院にてMBA修了。その後、中央仏教学院を経て安芸教区広陵西組・善法寺に入寺。現在、善法寺坊守。宗派では仏教こども新聞編集委員、企画諮問会議委員を務める。

## 【著作】

『親子で読めるほとけさまのお話』共著（本願寺出版、二〇一四年）

の宗門最大の特徴です。「大黒さん」という呼び方があるお寺はありますが、他宗派では呼び名自体がなかったりします。禅宗などは最近になって「寺院婦人」などの呼称が使われるようになりま

したが、我々は伝統的に、家族による寺院運営を行ってきた証拠として、古くから「坊守」という呼称が使われています。その特性を活かすにはどうしたらいいのか、ということが委員会の検討課題に挙がりました。

（藤丸） 坊守さんを対象として、今後ど

のような教育の機会や環境を整えることが必要でしょうか。今まさしく坊守として活躍されている前田先生から、ご意見を頂戴したいと思います。

坊守の日々の寺務軽減に  
応える研修の開発

（前田） 私の場合は中央仏教学院で学ぶ機会をいただいたのですが、そのような機会がない場合はご苦労が多いと感じます。そのため、坊守研修などで学びの場を提供することは重要だと思います。しかし、坊守は多忙でまとまった時間を作

ることは困難です。またお寺を空けることもできにくいため、スマートフォンでeラーニングのような気軽に学習できるシステムが欲しいです。

同時に坊守の日々の負担を軽減できるような仕組みが欲しいとも感じています。どのようにお寺の掃除をしているのか、どのように出先で電話を受け付けているのかなど、今さら聞きづらい情報を得られるようになればいいと思います。そのために、地域を超えた坊守同士の研修機会を本山で設けていただき、寺務の軽減に繋がる会計ソフトの講習会などを開催して欲しいと思っています。

## 情報コーナー

(丘山) 貴重なご意見、ありがとうございます。  
eラーニングについては、検討  
が必要な課題だと認識しています。

## 坊守の声を吸い上げる仕組みが必要

(三田) 私の自坊も、私の不在が多く、  
坊守の存在なくしては運営できません。  
坊守は在家出身のため、大学などで仏  
教・真宗を学ぶ機会はなかったのです  
が、それがかえって良かったとも感じて  
います。知識が多少あることよりも、ご  
門徒と一緒に学び、歩む姿勢、同じ立場  
であることが共感を得ているように思う  
からです。

また、「同じ環境の坊守さんと話した  
い」ということをよく聞きます。私の自  
坊は京都府北部の過疎・高齢化が著し  
い地域にあります。京都教区内でも地域  
の事情はさまざまです。同じ教区の都市  
部の方々よりも、同じような環境、過疎  
地にある他教区の方と話をしてみたいと  
いう声はよく耳にします。

お寺における坊守さんの力は言うまで  
もなく重要で、かつて、『宗報』にも  
「女子力」をテーマに書かせていただき  
ました。この「女子力」こそが「一緒  
性」の特徴の一つであり、あるべき姿だ  
とも思います。私が勤務している新聞社  
は男社会のイメージが根深いですが、そ  
れでも三分の一近くの社員が女性です。  
私たちの宗門でももっと女性の視点を重  
視して個々が活動できるよう、坊守さん  
の声を吸い上げる仕組みづくりが必要で  
あると強く感じます。

## 教区単位での坊守式を開催しては

(釈) 他宗の僧侶養成プロジェクト関係  
者に話を聞くと、本願寺派では全国各地  
に別院や教務所が網羅的に存在している  
ことを羨ましがられます。坊守の研修会  
も各地域で行われていますが、参加者は  
同じようなメンバーで、魅力的な内容に  
なっていないという声も聞きます。各地  
の別院や教務所の力を見直して、教区単

位で坊守式を可能とするなど、中央が持  
っている権限を地域に委譲し、「教区」  
レベルで地域特性に合わせた僧侶養成も  
考えてはどうかと感じました。

## 夫婦が共同参画するあり方

(満井) 私も坊守である妻がいなけれ  
ば、お寺は運営できません。もつとお寺  
を地域のなかで、夫婦で共同参画しなが  
ら培っていきうあり方を求めているとい  
思っています。

だからこそ、お寺から出ることが難し  
い坊守の環境を改善し、外で研修を受け  
たり情報交換をしたりして、自分のあり  
方を見つめる場を持つことができるよう  
にしなければならぬと思っています。

(藤丸) 最初に釈先生から、日本仏教の  
特質が、家族による寺院運営にあるとい  
うご指摘を頂戴しました。その特質を活  
かすためにはどうすべきかという課題が  
出されたわけですが、それについて三田

## 第5回 宗門教学会議 開催報告

先生から、地域と繋がっている坊守の意見を吸い上げられているだろうかという問題提起がございました。宗派のなかで坊守の重要性は共有されていると思いますが、その価値を宗門の大切な財産とできているのだろうか。本当の価値にするためには、声を吸い上げ、それに<sup>こた</sup>えていく宗門運営が必要であり、そのための仕組みが必要というご意見には<sup>うなず</sup>肯かされ

## テーマ⑥

## 誰もが学びを深めるために

(藤丸) それでは最後のテーマです。これまで議論になりましたが、宗門の人材育成を考えたときに、宗門の一人ひとりが学び続けられる状況をどうつくりあげるか、ということが重要な課題です。「得度や教師の時しか学べる機会がない」という方も多いなかで、学び続ける機会をどうつくるか、この点について考えたと思います。

ました。一方で、寺務に忙殺されているのは、坊守さんが地域の活動に参画することとは困難になります。寺務をどう省力化していくか、その方法を開発する必要があると前田先生からご提案がありました。これについては丘山所長より、新たな取り組みがあるとの報告がありました。

## 感動を与えるカリキュラムの構築

(丘山) 「学びたい」「深めたい」という思いを持つていただけない方々に、どうはたらきかけるかという問題があります。先ほども「講師」の重要性について議論しましたが、やはり受講者が圧倒的な感動を得ることができれば、「いつか私もあんな布教使になりたい」「ああい

う儀礼を自分もやりたい」となるでしょう。得度習礼の十日間で一人や二人、そういう先生に出会えたら、それが学びの継続性になるのではないかと思います。

各地に根付く真宗文化や  
真宗エートスの再評価

(釈) 宗門ではいろいろなセミナーや研修を行っていますので、その気になれば生涯学び続けることは可能です。では、その気になっていただくためにどうすべきか。学びとは少し異なりますが、私は「評価される」ということがとても大事だと思っています。多様な真宗文化が各地にあります。当地の人にとっては当たり前ですが、もうやめても良いのではと思われている文化が結構あります。滋賀県の「ぼんやりさん」や三重県いなべの「辛子汁」など、最近有名になりましたが、実は途絶えかけていました。ところが、「すばらしい」という評価を受けると、「これは続けなければならない」と

## 情報コーナー



なり、今また少し盛り返しているようです。そこで、各地の真宗文化をきちんと調査して、それを高く評価するということとを誰かやらないと、多分消えてしまうでしょう。何百年続いても消えるのは一瞬です。リサーチや評価などをやろうとする人はなかなかいないので、やはり宗派の課題ではないかと思います。宗派で、各地で続く真宗文化や真宗独特のエートスをきちんと調査し高く評価し、宗派内外に提示していく作業の必要性を個人的に感じております。

**〔藤丸〕** このような「答申書」が出る  
と、つい「新しい人材育成」の形にとら  
われてしましますが、伝統的なものへの  
評価も重要ということですね。

### 宗門教育のリノベーションを

**〔釈〕** 宗門の人材育成に関して、個人的  
に私は「リペア」（修繕）派、「リノベ  
ーション」（修復）派です。今までの制度  
は機能しなくなっているものもあれば、  
本当によくできているものもたくさんあ  
ると思います。また、得度習礼・教師教  
修に関する過去の取り組みをもう一度点

検すれば、優れたものがあるのではない  
でしょうか。そういうものを見つけ出す  
必要があります。宗教というのは急ハン  
ドルが馴染みません。宗教の流れている  
時間は、社会よりもずっとゆっくりで  
す。ですから、かつてやっていたものを  
点検し、リノベーションして提供するこ  
とは、ものすごく大事だと思います。

### 五感を使った教育方法

**〔前田〕** ファッションは時代を超えて繰  
り返す傾向がありますね。リノベシヨ  
ンもイノベーション（革新）の一種なの

### 三田真史氏

一九六四年生まれ。龍谷大学大学院文学研究科博士課程中退。一九九一年、京都新聞社入社。社会部、文化部などを経て現在、京都新聞社編集局文化部長・論説委員、京都教区天橋組・浄福寺住職。宗派では企画諮問会議委員を務める。

#### 【著作】

二〇〇六年四月から本願寺派『宗報』にコラム「こころ通信——宗教都市・京都から」を連載している。

## 第5回 宗門教学会議 開催報告



## 徳永 一道氏

一九四一年生まれ。大阪外国語大学英語学科卒業。一九七二年、龍谷大学大学院文学研究科真宗学専攻博士課程単位取得満期退学。現在、勸学寮頭、京都女子大学名誉教授、大阪教区河中南組・正福寺住職。専門は真宗学。

## 【著作】

『英文真宗聖典シリーズ』（共訳、本願寺国際センター）  
『真実信心の仏道』（Alfred Bloom, Essential Shiran: A Buddhist Path of True Entrusting の日本語訳監訳）（毎日新聞社、二〇一〇年）  
「開かれた浄土真宗——教えを床の間に飾ってよいのか？」（『本願寺白熱教室』所収、法蔵館、二〇一五年）など

かと改めて思われました。今までどんな時に学びを深めたかを思い返すと、特定のご法話が良かったということではありません。専門学校での先生や友だちとの会話、ご門徒であるお婆ちゃんの一挙手一投足から学んだことなど、五感を通して経験したことが私の学びに繋がっていると思います。最初に浄土真宗の法話を聞いて、「耳」からの情報に非常に重きが置かれていたと感じました。それが良い悪いではなく、もっと五感を使ったやり方を試しても良いのではと思います。実際に、五感に訴える実践をされて

いる方もおられます。紙芝居などを使った法話、御絵伝の映像を流しながら行う法話など、現場では工夫ある伝道が行われています。もっといろいろな感覚をつかみながら、新しい手法を試みるのが重要だと思っています。

## 人を通じてお念仏のみ教えは伝わる

（三田） 私は、カルチャーセンターのようによくの人からさまざまなことを学ぶよりも、法話においては自分の感性や考

えに合う先生、私にとっての念仏の師匠というような存在が、やはり重要ではないかと思っています。「この先生の話がずっと聞き続けたい」と思えるような師の存在です。人を通じてのみ、お念仏のみ教えは伝わると、学生時代の恩師から教わりました。私は三〇年前に出会った、あるご講師の名前と話の内容を今でも覚えています。今までに会ったことのない人との出会いが、非常に大きなインパクトを持って自分の存在を揺るがし、経験したことのない感動を与えるので

## 情報コーナー

す。このような、お念仏の師匠、人と出会う機会を宗門がこれからも積極的に提供したり、支援したりすることが大切なのではないのでしょうか。

## 魅力のある教員の養成

（徳永） 私は、宗門関係学校での伝道が非常に大事だと思います。貴重な宗門の財産です。そこで宗教教育を充実させれば、大変大きな効果が期待されます。私が長年勤めた京都女子大学の場合、仏教は八単位分の必修科目です。否が応でも学生はそれをとらなければ卒業できない。反対も多いなかでそれを押し切つてやってきました。要するに、学校を運営する側の姿勢も大事ということなんです。とにかく浄土真宗のご法義は魅力があります。そうした魅力あるご法義が説けるような、魅力のある教員を養成することが大切です。

（藤丸） ありがとうございます。各先

生方から重要なご指摘をいただきました。『宗報』（二〇一六年五月号）では、布教使に対する非常に厳しいデータが掲載され、話題となりました。今後、布教使に限らず、将来を担う宗門の人材をどう育成していくのか。そのための育成制度の変革が求められています。今回の宗門教学会議でも、厳しい現実を見据えた上で、何をやるのかということが極めて重要であることをご指摘いただきました。今後、議論を進めていきたいと思っています。人材育成の議論は始まったばかりです。また永遠の課題でもあります。皆さまのお知恵をいただきながらと思っていますので、今後ともご協力をお願い申し上げます。長時間にわたり行ってきたセッションにつきましては、これをもって終了とさせていただきます。ありがとうございました。

（本願寺派総合研究所 教団総合研究室）